

# 保育を広げる自己評価の在り方 ～理想の保育は園庭の外に～

発表者 松橋 恵美 (認定こども園百石幼稚園 副園長)

共同研究者 立崎 博則 (青森中央短期大学幼児保育学科 助教)

## 創造力を養う為の造形活動の提案としての人と人をつなぐ・小さな夢を叶える・初体験する造形活動

青森中央短期 大学幼児保育学科 立崎博則

幼児美術の領域では、昨今、道具の使い方や上手に絵を描く方法を教えるだけではなく、独創的なアイデアを生み出す力を養うような目標が見られる。幼稚園教育要領を引用すると「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とある。これは下手でも良い、という解釈ではなく、上手下手の他に新たな評価基準を持つと言う意味だと理解できる。それでは、どのようにしたら、新しい物を作る力を養う為の造形活動を組み立てられるのか。というのがこの研究のメインテーマに設定された課題である。

この問いについての一つの答えとして美術館や美術祭などで取り組まれるキッズ向けのワークショップを参照する事から研究は始まった。地元である青森県立美術館で行われている子供向けワークショップキッズルームおはなし会 2013 や、愛知県で行われていた愛知トリエンナーレのキッズトリエンナーレというワークショップに見られる一つの傾向に、現代美術のある側面と一致する点が見つかった。それは新しい物との出会いといつもと違った見方の提案という側面であった。

知らない他人と出会い、いつもの友達や家族と再度新しい形で出会い、そして自分とも出会う。また、輪ゴムや紙コップなどいつもの素材を違った見方で再発見する面白さがメインのテーマのワークショップが、美術館のキッズプログラムなどには多数見られた。

この美術館ワークショップの特色でもある、人との出会い・人と人をつなぐをテーマに、百石幼稚園でのワークショップを構成し実践した。その一つとしての「森のコンビニ弁当」とタイトルされた活動では、お母さんをびっくりさせるお弁当を作ろうという目標を子ども達と共有し、次に、「先生の木」という活動では先生をキャンバスにする事により、子ども達が先生を中心に制作するように環境を整えた。

これらのワークショップでは良かった点・改善する事が可能な点と様々なベクトルでの課題を得る事が出来た。そ

の中には、幼稚園教諭を目指す幼児保育学科の学生にどうそれを伝えるかという問題もまた持ち上がった。人と人をつなげるという事を念頭に造形活動を作ってみようという説明をしても、漠然とした部分はなくならない。なぜならそれはその造形活動を作る学生の経験に頼る部分が大きくなるからだ。人と人をつなげる造形活動は、子ども達に、ただ制作させるのではなく、お母さんや先生へのプレゼントという、明確なゴールを見せるという事を可能にしている。しかしそれはまたゴールまでの手順は重要ではないと、学生に誤解させるような事になるかもしれない。

では、どのような手順でその人と人をつなげるゴールまで導けばいいのだろうかというのが、次の課題である。子ども達はなんの為に作っているのか。子ども達にどう感じて欲しいのか。という問いに対して、今の答えは、新しい物と出会うって欲しい、初体験してほしい、という事になる。しかし、その時に疑問となるのは、子ども達に初体験させる側の先生は初体験しているのだろうか、という事ではないだろうか。初体験するとは、小さな夢を叶えるといったような意味だが、幼稚園の先生は小さな夢を描き、それを日々叶えているのだろうか。子ども達は毎日小さな夢をかなえている。そして、子ども達に次の新しい夢を見せる事が造形活動の役割の一つではある。

## 保育を広げる自己評価の在り方 ～理想の保育は園庭の外に～

認定こども園百石幼稚園 松橋 恵美

### 1. 実践教育の概要

自己評価、特に教員評価について、外部の講師や評価者の存在により、問題点が明確になった経験から、マンネリ化しがちな自己の保育に対するカンフル剤のような役割として、「外の視点」を保育に導入する試みを紹介。

キーワード [視点を変える](#)

### 2 研究の始まり

テーマ「造形活動を通じて、子供が伸びる関わりを考える」  
「得意不得意に関わらず、造形活動を好きでいる子供は、どのような関わりが有効だったのか。」という疑問に基づき、職員にアンケートを実施。

結果得意不得意は実際の技術によらず、「苦手だという思考の壁」ができたかできないかによって、決められていたことが分かる。

園でも、自己の苦手感から絵画指導に不安を持つ教諭が多いことから、どのように関わってもらったら、絵画や造形活動を好きになることができたのか？ アートワークショップを行いながら、望ましい関わりを試してみるという方法で活動がはじめられた。

アートワークショップは、青森中央短期大学助教の立崎博則先生にお願いし、立崎先生は、「人と人をつなぐ造形活動から小さな夢をかなえる・初体験する造形活動」を研究することになった。

### 3 アートワークショップについて

アートワークショップは、全3回。立崎先生が活動を考え、当日



ワークショップ 森のコンビニ

園の先生も一緒にワークショップを行う。

### 4 主題の変化点

アートワークショップを行った際、教諭は園児の予想外の反応に驚くとともに、自己の保育を振り返った。その際、外部講師から、日常意識していない自分の保育の関わりのよい点を教えられたり、普段の振り返りでは気づけないような、自分の保育の癖や改善点に積極的に気づくことができた。

園児・・・非日常の活動を行うことで、活動に対する期待が高まり、集中力も増したのではないかな？なぜ作るのかな？が明確で、取り組みやすかったのではないかな？

教諭・・・ともに活動しながら、主導権がなく、落ち着いて子供たちと自分の関わりを探ることができた。公開保育等で関わりを振り返るのは違い、余裕を持って様々な関わりを試すこともできた。

平成25年1月 青森県教員研修大会 「保育者の遊びの限界が子供の遊びの限界」とすれば、保育者の思考の限界を超えることで、保育が

広がる。持っている力や環境をよりよく生かすことができるのではないかな？

**「専門性を高めようとするときに、必要なのは 外部の視点」**

**という逆説的な大きな気づき！！**

そこで、テーマを「造形活動を通じて、子供が伸びる関わりを考える」から→「保育を広げる自己評価のあり方～理想の保育は園庭の外に～」変更することに。

### 5 研究の現在

専門家同士で深く掘り下げることと同時に、新たな視点を盛り込む大切さに気付く。

保育が広がり、園児も教諭も幸せを感じられるような評価の在り方を経験。

自己評価は継続できること、保育に生かし質を高めることが大切、であれば、続けられるだけの動機づけが必要。

私立幼稚園のめざす自己評価が「保護者や地域から信頼される幼稚園づくりを進めるための、実行力のある評価の実施」(私幼時報 6月号 安達 譲氏)であるとすれば、●園全体のモチベーションアップが不可欠 ●特に小規模園では、評価の実施自体が、仕事量の増加やマンネリに陥りやすいと考えるから。

特に、当園のような小規模園では、視点が固定されやすいのでは？ 構成人数が少なく、リーダーの意見が大きな影響力を持ちやすい。

その際、身近にファシリテーション(世話)してくれるような存在があるのは、大変ありがたい。 地方にこそ、ファシリテーターの育成が急務であると考える。

